

編 集 後 記

10月になって、突然方向（方針）転換することになったニュースが2件あった。2020年東京オリンピックのマラソンおよび競歩の競技地変更と、大学入学共通テストの英語民間試験導入延期である。いずれも実施を翌年に控えた段階での“ドタキャン”だが、その要因には共通点があることに気づかされる。

東京オリンピックについては「復興五輪」「コンパクト開催」などを謳いながら誘致したはずだが、エンブレムのデザインや新国立競技場の設計をやり直したのをはじめ、次から次へと当初予算をオーバーする事態に歯止めがかからなくなったあげくの競技地移転である。競技者のためにと費やしてきた暑さ対策費は決して安くない。とりあえず誘致することが優先で、経済効果などの都合のいい算盤ははじいても不都合な事実には目をつむって“何とかなるだろう”“後で考えればいい”と先延ばしにしてきたツケとも言える。

英語民間試験導入については、そもそも異なる複数の試験評価を同一基準で公正に判断などできるはずがないという声は当初からあった。今回の決定の引き金となった大臣発言や、受験料のバラツキ、受験費用の地域間格差など、延期理由は枚挙に暇がないが、民間にボールを投げれば、受け手はプロなのだから“何とか知恵を出してくれるだろう”という思い込みが見え隠れする。

“何とかなるだろう”は、決定にかかわるすべての人がそれぞれ他人任せにしているかぎり、事が一向に前に進まないのは明白だ。

時期を同じくして、「金沢マラソン2019」にノーベル賞の山中伸弥教授が出走した。招待ゲストランナーではなく、ふるさと納税枠でエントリーした一般市民ランナーの一人としてだが、市民ランナーにしてはかなり速い3時間24分（自己ベスト）で完走している。山中教授は、研究支援を呼びかける目的で、スケジュールが合えば各地方の大会に出走しているという。研究活動に伴う費用が多額になることは素人感覚でもわかるが、公的予算では賄いきれない分を、山中教授自らが“何とかしなければ”という熱い使命感を持って取り組んでいるのがわかる。マラソンは気持ちだけで完走できるものではない。おそらく日ごろから節制し、研究活動の合間に寸暇を惜しんでトレーニングにも精を出しているに違いない。

“何とかなるだろう”“誰かが何とかするだろう”と、とりあえず実施することだけを決めて賛辞を受け、高みの見物をする人たちと、受けた栄誉は瞬時に過去のものとして未来を見据え、“今後も続けられるように何とかしよう”と名実ともに走り続けている人とのコントラストがはっきりした10月だった。

「星稜論苑」第48号の発刊に当たり、執筆された先生方の教育研究活動と成果に心から敬意を表し、感謝申し上げますとともに、今後もさらに精励されることを願いたい。

令和元年12月

山 本 航